

おばあさんの傘

高知 六年 ともこ



昼ごろ、授業中に窓を見ると雨が降っていました。私は、家を出るとき雨が降りそうなのを分かっていたのですが、傘を持っていくのがめんどくさくて、持っていきませんでした。

下校のときも、まだ、かなり雨が降っていました。私は宮脇ちゃんとみっちゃんと帰ることにしました。

くつ箱のところから、外に出ようとしたとき、宮脇ちゃんも、「傘を持ってきてない。」

と言いました。それで、みっちゃんの一つの傘に三人で入って帰ることにしました。

別れ道にきて、みっちゃんと宮脇ちゃんに、

「そしたら、バイバイ。」

と、手をふって傘からとびでました。二人も、

「うん。バイバイ。」

と、手をふりました。私は、なるべく雨にぬれないように走って帰ろうと思っすぐ走り出しました。

少し走って、人の家の玄関のひさしがあるところで走るのをやめました。やまんなかと思っって雨をみたけど、やみそうになかったので今度はたくさん走ろうと思っって、ひさしのところからかけだしました。

道路や屋根に当たる雨の音しか聞こえないくらいに降っていました。くつではねた水が足に当たっってぬれました。時々、雨が目に入って、走りながら手で顔をぬぐいました。

公園の前を走りすぎて、もっと走りました。道ばたに生えている木を見つっけて、木の下で少し休もうと思っって、そこまで急いで走りました。木の下につっいて、ぬれた服をパタパタゆらしながら、ハアハア言っっていました。顔が熱くなっって少し汗がつっいていました。

休んでいると、私の目の前を透明のレインコートを着たおばさんが、私の方をちらっちらっと思ながら通りすぎました。そのおばさんが急にふり返っって、

「ちょっと待ちよりなさいや。ビニールの傘やけど、持ってきてあげるき。」

と、言いました。

私は、突然、それも知らない人にそんなことを言われたので、

「いいです。」

と、ニコツとして言いました。でも、おばさんは、

「いいき。待ちよりなさいや。」

と言って、そのまま走って行きました。おばさんは、近くの家の門を入って行きました。

私は、また服をパタパタさせながら、本当にいいのかなあと思っていました。そんなことを思っているうちに、おばさんが傘を一本走って持ってきてくれました。

「はい。三本あるきね。」

と言って、黒いビニール傘を柄の方を私に向けてわたししてくれました。私は、傘を受け取って、

「ありがとうございます。」

と、おじぎをしながら言いました。おばさんは、

「そしたらね。なぜならんようにね。」

と言って、背中を向けて帰ろうとしました。私は、少しあわてて、

「あのう。」

と言うと、ふり返ったので、

「傘返さなくていいんですか。」

と、おばさんの顔を見ながら言いました。おばさんは、左手を顔の前でふりながら、

「返さんでいいき。三本あるきね。」

と、言いました。おばさんが、

「そしたらね。」

と言ったので、

「ありがとうございます。」

と、また、お礼を言いました。

私は、傘をさして帰りながら、もう一度ふり返っておばさんを見ました。おばさんは、ゆっくり歩いて帰って行きました。私もゆっくり歩いて行きました。

傘に当たる雨の音が、パラパラと聞こえました。

(指導 細川幹夫)